不定期刊行　　第640号　2018.02.27

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩

高雪研ＩＮ群馬２（群馬県　井田祐一先生の情報提供）

生活技術以外にも、山岳部顧問としての在り方や今後の山行の計画についてなど顧問歴の長い先生方から経験に基づく様々なアドバイスをいただき、顧問経験の浅い者にとって大変参考となる話が夕食を取りつつ続いた。そんな楽しいテント内とは対照的に天候は大いに荒れ、外は猛吹雪であった。途中、雉撃ちにテントの外へ出ると凄まじい風と雪で、雉撃ち一つも命がけという、雪山の恐ろしさを垣間見た瞬間であった。猛吹雪は就寝後も続き、一晩中続いたようだった。

早朝のテン場

三日目の朝は5時に起床し、寝袋を片付け、素早く朝食を済ませる。テントの外に出ると風は弱まっていたが、降雪は続き、一晩で50センチ以上は降ったと思われる雪でテントの周辺は埋もれていた。本日の行動は当初はサブザックで冬路沢から富士見峠に登り、幕営地に戻ってテントを撤収後、戸倉スキー場へ下山する計画であった。しかし、一晩中降り続いた降雪と雪崩の危険性を考慮し、幕営地からそのまま下山することにした。

田代原への下り

テントを撤収し、全員で記念写真を撮影後、7時45分に幕営地から下山を開始。田代原から膝上ラッセルをローテーションで行いながら、尾根伝いに下り、8時50分に十二曲に繋がる夏道と合流。前日から降り続く雪により雪崩の危険性は高まっているため、警戒しつつ素早く危険箇所を通過。全員無事に通過後、ワカン・スノーシュー班と山スキー班に分かれ富士見下山荘跡へ向けて下っていく。今回はスノーシューを使用したが、ワカンやスキーなどの他のギアと長所・短所を比較しつつ、技術に習熟し山域に合わせて選択できるようになりたい。

富士見下から林道を下る

9時32分に富士見下山荘跡に到着。ここから戸倉スキー場までは傾斜は緩く、ひたすら下りが続くが、積雪が多く距離も長いので、ワカン・スノーシュー班全員でラッセルをローテーションしながら進んでいく。山スキー班はそのトレースを利用するという具合だ。およそ100～200複歩で交代をする中で、10時16分に堰に到着。その先の雪崩危険箇所も全員が無事に通過し、10時43分にスタート地点であるスキー場近くの林道の広場に到着、登山行動を終了した。

今回初参加となった先生方から恒例の感想が述べられ、初日の座学で学んだ様々な理論と二日目以降の登山行動における実践をしっかりと結びつけ、生徒の安全を確保しつつ、充実した山行を行うためにも今後もぜひこうした講習会に参加したいとの言葉があ

った。
　二日目と三日目は天候に恵まれず、景色などを楽しむことはできなかったが、荒天であったからこそ、より多くのことを学ぶことができた。

群馬県でも高校生向けビーコンを配備

　小生は初日の座学のみの参加であったが、懐かしい村上泰賢先生、高橋守男先生、小林達也先生、田中洋史先生にもお会いすることができた。こういった先生方が築き上げてきた技術や知識が受け継がれることで、高校山岳部顧問の力量は担保されてきた。しかし、今どの県でもこういった知識や技術の伝承がしづらい現象が生まれはじめている。今、高体連を主力として支えている50代の先生方が退職してしまう前に、再び顧問の教育ステムを構築することがどの都道府県でも求められていると思う。
　これらの先生方にお会いする中で、群馬県が高体連としてもこの講習会をはじめとして講習システムがきちんと確立していることを気づかされるとともに、県としても山岳部を大切にしているということを改めて感じた。実は、小生、昨年12月8日にも群馬県教委の招きで、高校山岳部の活動について登山専門部の先生方にお話をする機会をいただいた。こちらは、栃木の事故を受けて、群馬県教委が高校山岳の顧問研修の必要性を感じ、県教委として講習会の開催を企画、適任かどうかはさておいて、その講師として小生に白羽の矢が立ったのであった。そこでは、高校山岳部の安全対策についてという演題でつたない経験を話させていただいた。そのときも、会場の群馬県庁には40名くらいの先生が集まっておられ熱心に聞いてくださった。
　井田先生によれば、群馬県では、冬山でのルールをきちんと定めたうえ、県教委としてビーコン（マムートバリフォックス）を20台、高校生用に購入するということ（長野県に続いて2県目）だ。栃木の雪崩を受けての検証委員会の報告やそれに続くスポーツ庁の通知に基づいて、安全に冬山での活動をしてほしいという願いが込められているものだと思う。まだまだハードルは高いが、各校でビーコンを用意することが現実的ではない高校山岳部において、この流れが一つの流れとして広がることを大いに期待したい。